川崎医療福祉学会誌　Vol. 27　No. 2　2018　293－301

原　著

旧約聖書の知恵文学における「知恵」理解にみられるスピリチュアリティ

梶　原　直　美*1

要　　約

本稿は，旧約聖書の知恵文学にみられる知恵理解における，知恵とスピリチュアリティとの関連性について，聖書の原典を資料として考察した．その結果，まず，現実における秩序を軸として知恵が考察されていること，そしてそこでは，功利的知恵，倫理的知恵といった実際的な知恵と，根本的知恵，超越的知恵といった，超越者の存在を視点に据えた知恵理解がなされていることが明らかとなった．また，スピリチュアリティは，霊を与えられた人間に全人的にかつ日常的に備わっているものであり，それは知恵と同様に神としての超越者から与えられたものであるという点，さらに，知恵がその超越者の存在を人間に示し，それを信頼して歩む幸福へと導くものであると考えられていた点が明らかとなった．

1．緒論

近年，福祉分野ではスピリチュアリティに関する研究が盛んに展開されている．スピリチュアリティは，人間の幸福（well-being）に関わるものとしても理解される[1]．「福祉」（welfare/well-being）という語にもまた「幸福」という意味が含まれているが，幸福に関する研究では，幸福と知恵との関係も指摘されている．たとえば Ardelt & Edwards は，知恵を識知的，熟考的，情緒的側面からとらえて高齢者の幸福感に照らした結果，両者に関連性がみられることを提示している[2]．また，Krause & Hayward の研究は，実践的知恵と肯定的感情との関連性を指摘している[3]．これらの研究の対象者の立場は限定されているものの，幸福への手がかりを得るうえでも意義深い研究と言えるであろう．

では「知恵」とはいったい何を指すのか．一般に，知恵はそれを用いる本人のみに帰され，また，生きるための実践的な力[4,5)†1)]としても理解される．春日らは，1980年から2010年までの欧米文献に基づき，「知恵」の定義が非常に多様であること，またその多様性のなかに共通する点として，知恵がとくに高齢期の幸福に大きく寄与するものとして理解される傾向にあったが，年齢とは無関係との結果もまたみられることに言及している．そこでは，実態として把握しがたい知恵を定義することへの困難さが指摘されている[6]．

宗教の聖典のひとつである聖書[7-9]の旧約における知恵文学[†2)]は知恵を非常に重視し，これを人間の幸福や安寧と強く結びつけ，また知恵を懇願する叙述を多く含んでいる[†3)]．WHO がスピリチュアリティの理解のさいに宗教性も重視している[10]ことを考量すると，旧約聖書の知恵文学における知恵理解には，幸福のみならずスピリチュアリティに関する示唆も得られることが推測される．

ゆえに，本研究は，旧約聖書のなかで知恵文学と呼ばれる「ヨブ記」，「箴言」，「コヘレトの言葉」において知恵がどのように理解されているのか，またその知恵においてスピリチュアリティがどのように位置づけられ，あるいは機能すると考えられているのかを提示する．これにより，スピリチュアリティの本質に関する一側面を提示することが本研究の目的である．

*1 関西学院大学　教育学部
（連絡先）梶原直美　〒662-0827　兵庫県西宮市岡田山7-54　関西学院大学
E-mail : kajihara@kwansei.ac.jp

論述にあたって，まず旧約聖書の知恵文学における「知恵」の用語と背景，および特徴について述べ，その内容として理解されている「秩序」を中心に論じる．そしてその秩序のあり方から，スピリチュアリティに関する示唆を提示する．研究方法としては，聖書のヘブライ語原典を用いた文献研究による．なお，外典は今回用いない．

２．旧約聖書の知恵理解に関する考察へ向けて

２．１ 「知恵」に関する用語

英語の“wisdom”として訳される日本語の「知恵」は，旧約聖書のヘブライ語では「ホクマー」（חכמה）という語に相当し，ここには，一般的に理解される実践的な聡明さのほか，熟練職人の技巧，魔術的な能力，また狡猾さといった意味も含まれる[11-12]．

ホクマーは，概して知恵の豊かさを表現する語であるが，それを全体的あるいは部分的に意味する語はホクマー以外にも存在した[13)†4)]（p.435）．たとえば「ダアト」（דעת）というヘブライ語は知識を意味するが[14]，ホクマーもダアトも辞書的に重複する意味を持ち合わせており，同類の他の語と重なって相互補完的な文脈で使用される場合も多い．これらの語は，指摘されるように意図的に使い分けられることも確かにあろうが[15)†5)]，知恵という深遠で提示し難い対象の性質を確認させ，表現しようとするところに，その意味を理解し得る[13)†6)]（pp.191-192）．ゆえに，本稿では，知識も含めた広義の意味としての「知恵」に言及することとする．

２．２ 知恵文学の背景

知恵は世界を理解しようとする努力から生じ，古代オリエント，とくにエジプトにおいて，知恵文学が多数成立した[16]（pp.485-486）．エジプトでは世界の中心には宇宙秩序を意味する「マアト」[17]という概念が据えられていたが，イスラエルは，全体的に世界を支配する根本的秩序のみならず，個別かつ多様に存在する秩序の諸関係を発見しようとしたことが指摘される[16]（p.486）．

知恵文学の内容の多くは，繁栄したソロモンの王国時代から王国分裂を経て滅びゆく期間に執筆された．クレンショウは，宗教と倫理が一体であることが古代の知恵の特徴であり，旧約時代の彼らも，神の現存のもと，共同生活が倫理実践の場となっていたことを指摘する[18]．そして混乱と危機の時代，抑圧的な社会のなかで本質的変化が迫られ，知恵文学はそれへの応答を提示した．これがヨブ記とコヘレトの言葉の執筆背景である．

このように，ヨブ記，箴言，コヘレトの言葉という旧約聖書の知恵文学に提示される知恵への考え方，向き合い方は，時代によって異なっている．ただ変わらないのは信仰が保ち続けられたということであり，新たな時代のなかには新たな法則性，秩序を見出そうとする努力がなされた[13]（pp.81-85）．

３．旧約聖書の知恵文学における知恵の特徴

このような背景のもとで知恵文学が伝える知恵について，その主たる内容を以下で述べる．

まず，知恵の重要性が提示されている点である．それは，知恵が天地創造に先立って創造され[7-9]（箴言8,22-29），天地創造のさいに知恵が用いられた[7-9]（箴言3,19）という理解のなかに見ることができる．また，知恵は，天地創造のさいの建築家として，あるいは神に喜ばれ，神のそばにいる子どもとして，言及されている[7-9,19)†7)]（箴言8,30; pp.229-230）．ここに示されるのは時間的先行性といった側面にかぎらず，被造物における知恵の優越性であり，人間にとっても知恵が重要なものであることを示していることが指摘される[16]（p.496）．ゆえに，この知恵を所有することが多くの箇所で賛美され，奨励されている[7-9]（箴言16,16）．ただし，知恵自体が，たとえば人生を確実に歩ませるものとしての信仰の対象になることはない．知恵もまた，神の優越性には及ばない[7-9]（箴言21,30）．

二つめには，知恵が神によって開示されたという点が挙げられる[12]．知恵文学には，知恵を「得よ」という言葉が頻出するが[7-9]（箴言4,5; 4,7; 6,6; 8,33），それを与えるのは神である．ゆえに，知恵は「神からくる」とも述べられる[7-9]（箴言2,6）．これらからは，知恵は人間の努力によってのみ獲得されるものではなく，それを与える神の意思と行為が先行する，という認識を読み取ることができる．聖書は，開示されたこの知恵の教えが賢者たちをとおしてもたらされたことを伝えるが，賢者たちがどのようにしてその知恵に到達するかは不明であり[13]（p.377），それもまた人間の管理下にはおかれない．

そして三つめは，知恵が提示する内容としての「秩序」である．知恵とは，世界を存在させる「秩序」という真理を探究し説明することを目的とするものとして理解し得る[20]．聖書は，天地創造によって混沌に秩序が与えられ，この秩序によって世界を統治する神の力の現れを伝えている．この秩序は世界の根本を成し，同時に，働くべきことや徳ある生き方の奨励など，人間の生き方に関する秩序をも含む[21]．

その秩序のなかで際立つのが「主を畏れる」という人間のあり方である．これはイスラエルに特徴的であることが指摘されるが[13]（p.95），神を畏れ信仰

を持つという神に対する関わり方が，自らの生きる世界に関する適切な認識につながると考えられている．

知恵文学は，以上のような知恵の重要性，知恵を与えられた幸いとその主体，知恵の示す秩序について積極的に提示している．これらは教えとして人間に与えられるが，人間はその教えと多様に関わることができる．つまり，その教えを遵守することも，あるいはそれを無視することも可能である．選ぶべきものを知り，それを識別し，そしてそれを実際に行為するか否かという選択の連続のすべてのプロセスに，知恵は関わる．

４．知恵の内容としての秩序

４．１　それぞれの文脈における秩序理解

４．１．１　箴言から

以下では，先に述べた知恵の内容に相当する「秩序」について考察する．秩序に関する提示の仕方は，箴言と，他の二つの文書では大きく異なっているため，両者に分けて論じる．

まず，箴言は，秩序について，とくに日常的視点から勧めを与えようとする．ここには，様々な行為への明確な洞察とともに，実際的な事柄に関する言及が多く見られる．パーデューは，箴言において，知恵が，観察や洞察を導く知識，事実の観察ではない想像力，教育や訓育による賢明さ，神を畏れることを知る敬虔さ，公平性や正義などの秩序，道徳観を涵養するために提示された世界観としての道徳的教え，といった側面で機能していると理解している[19]．たとえば，知識としての知恵は，何が適切であり何が不適切であるかを識別し，想像力は不思議さや目に見えない世界についての認識を助ける．教育や訓育は不本意な失敗を回避させ，神への敬虔さは信仰によって生きる土台を構築する．秩序はこの世で実現されるべきあり方を示し，道徳は社会秩序を保たせるよう働く．

箴言は，ここに示されている秩序を守ることによって，「アシュレー」（אשיר）や「トーブ」（טוב）と表現される状態に帰結することを何度も伝える．「アシュレー」とは幸福な状態を意味し，日本語では「幸い」，英語では“happiness”，“blessedness”と訳され，とくに箴言では知恵を見出した人が幸いとされている[7-9,22]（箴言3,13）．また，「トーブ」は，知恵文学のなかでは，善，美，豊かさ，倫理的規範，無条件の服従などを示す[23]．

つまり，人間が日常のなかで様々な選択を行うさい，知恵をとおして秩序が示され，その秩序は以上のような幸福，善，美，豊かさへと人間を導くと考えられていることがわかる．その秩序を守る態度選択のなかに，神からの祝福が与えられる．この方向性の主体は神という超越者であり，この意思が人間の日常全体に影響する．人間にとって，この秩序は善には善が報いるという考え方として理解され，これに基づいて善なる行為が促進されることになる．

４．１．２　伝道の書，コヘレトの言葉から

しかし，人間はこの秩序によってとらえられない現実に直面することがある．箴言以外の知恵文学のうち，ヨブ記には理由なく大きな苦しみを経験する義人ヨブが，コヘレトの言葉にはこの世に対する空しさを告白する賢者コヘレトが描かれており，いずれも理不尽で不可解な現実からの問いを提示している．神は，信頼する者，善なる者を苦難の中に放置するのか？という問いである．

ヨブは，秩序の規範性に収まらない自らの悲惨な現実のなかで，自分を苦しめる力が神からのものなのか，その理由や意味について飽きることなく問いを提示し，神との直接対決を望む[7-9]（ヨブ記13,3）．しかし，自らの生をかけたその問いと叫びは，既存の世界観，閉じられた認識によるものであった．問い続けるヨブに，神もまたヨブへの問いをもって答える．それはヨブの生きる世界に関する問いであった．そこで，世のはじめのことを自分が何も「知らない」ことに，ヨブは改めて気づく．煩悶するヨブは苦闘のすえ神に対して降参し，神に自らを明け渡すこととなった．ヨブは，自らの知恵による議論によって神の知恵全体を掌握することはできなかったのである．人間は人間の延長上に神を考えるが，神はそれを超越した存在であって人間の延長ではないのであり，その意味で超越者である．ここには量的には解決できない質的な差異が存在する．

他方，コヘレトは，秩序を示す知恵に対する賛美を否定的に眺める．コヘレトの言葉は，「すべては空しい」[7-9]（コヘレトの言葉1,2）と嘆きの言葉の羅列で始まる．コヘレトの言葉の主題は，人間の儚さ，自己に対する人間の無力さ，神の意志の測り難さであると理解されている[24]（p.41）．空しさの告白で始まったこの書は，しかし後半で，人生のその時を楽しむことの勧めに取って代わる．これは一時的な享楽ではなく，命ある者としての可能性への気づきによる．次の瞬間の出来事さえ知り得ない人間に，この空しさは，どれほど尽力しても満たせない．ブラウンは，ここに，人間が自己の有限性を認識すべきこと，また，測りがたい神と世界に対して正直であることが求められていることを指摘する[24]（pp.6-7）．やがてコヘレトは，知恵によって把握することのできないことや無秩序のように見える在り方のなかに

も，神の意思が働いていることを告白するに到る．

４．２　根本的秩序と超越的秩序

知恵は，以上のような秩序の根底に，「神を畏れること」[7-9]（ヨブ記1,1; 1,8; 2,3; 4,6; 15,04; 22,4; 28,28; 37,24; 箴言1,7）を教える．

箴言は，主を畏れることについて17か所で言及し，それによってよい知恵や長寿，まっすぐな歩みが与えられると理解している[7-9]（箴言1,07; 1,29; 2,5; 3,7; 8,13; 9,10; 10,27; 14,2; 14,16; 14,26; 14,27; 15,16; 15,33; 16,6; 19,23; 24,21; 31,30.）．そして，人間には決して知り得ないものがあると告げる[7-9]（箴言21,30-31）．

ヨブ記では，神からくる知恵は人間の知恵と明確に区別され，「神を畏れ，悪を避ける」こととされている[7-9]（ヨブ記28,28）．ヨブも彼の友人たちも，理性による議論をとおしてこの知恵の本性にたどり着くことができなかったことを，ヨブ記は伝える．そして，知恵が神独自の占有物であり，それの本質は定義されないことを明示する[7-9]（ヨブ記28,12-28）．これについて Whybray は，もしヨブ記の著者の意図が知恵の本質を教えることなら，その意図どおりにいかなかったことになるのであり，そのためにはこの書の本当の目的をどこかに見る必要があるとさえ指摘している[25]（p.236）．それは，Fox の述べるように，知恵はわれわれに知恵を「聞く」こと以外の要求を行わない[26]（p.632）というところに見ることができる．

何が知恵であるのかをわからないままにし，人間に正体を明かさないこのような知恵は，箴言においてもヨブ記においても言及されている．それは，人間の認識を超えているという意味において，超越的知恵と呼び得るであろう．

コヘレトの言葉もまた神を畏れることに言及し，それを人間の本質なあり方としてとらえている[7-9]（コヘレトの言葉3,14）．そして，生の空しさを語りながらも，神を畏れることに対しては終始変わらずそれを促している[7-9]（コヘレトの言葉5,6; 7,18; 8,12; 8,13; 12,13）．このあり方への知を，根本的知恵と呼び得るであろう．それはすべての知恵の根底に必要とされるものである．

これらの文書は，神を畏れ，また，人間には絶対的に知り得ないことがあるという事実を了解するのが知恵である[20]ということを伝える．しかしこれは，人間を無知という限界のなかに閉じ込めるものではない[27]．たしかに，明らかにされないことを知識で理解することはできない．しかしそこに，「信じる」という信仰の働く余地が存在する．

知恵は単に理性的活動に関わるのではなく信仰と分かたれることなくより包括的な働きをするのであり，そこに知恵の偉大さがあったのだ，と von Rad が指摘するように[13]（p.86），知恵と信仰とは対立せず，現実体験と神体験も分離しない．箴言は，日常のなかに神が現在して働くということを教えるが[28]，このことは，神から開示された知恵と神への信仰をもって歩む日常の生の現場が神と出会う場でもあることを意味する．

神に対する信仰は神への信頼でもあり，神の創造した被造世界，またそこに展開される日常への信頼でもある．このような神と世界への信頼が，イスラエルの知恵を特徴づけている．その信頼においてこそ見出しうるものがあると同時に，その信頼は現実のなかで常に問われ，吟味され，止揚する．そのプロセスを経て得られた信頼の深まりが，霊的成長の具体的な現れであり，霊的基盤としての霊性の根本をなしていると言える．

５．知恵の示す「信仰」と「畏れ」―スピリチュアリティの一側面として

知恵が示し，人間の内に育まれる「信仰」という要因を，WHO はスピリチュアリティの構成要素のひとつに挙げている[29]．そして，それに先立って議論された内容に関する詳細なレポートのなかに，スピリチュアリティに関する質問項目のひとつである「畏れ」（awe）について，以下のような説明がなされている．「ここでは，あなたを取り囲む世界の美しさや不思議さの感覚，インスピレイション，そしてこれが生み出す興奮について確認します．これが感謝につながったり，もしくは神のそばにいる感じにつながる人がいるからです．また，ある人は自然の美しさに驚き，そのような美しさを楽しめることに感謝するかもしれません．この畏れ（awe）と感謝の感覚はあまりに絶大で･･･(略)･･･.」[30](p.15) ここでの畏れの対象は世界であり，世界に対して不思議さをもって驚きそこに感じる感謝が神の臨在の感覚に結びつくものであると理解されている．そして，そのなかの「畏れの感情はどれくらいあなたに力を与えますか？」（To what extent do feelings of awe inspire you?）という質問の“inspire”という語は，霊が吹き込まれることを表している．

では，このように霊が与えられ，人間が霊性すなわちスピリチュアリティを持つことはだれにでも可能なのか．

６．知恵と霊

人間の起源に関して，旧約聖書には「主なる神は，土の塵で人を形づくり，その鼻に命の息（ネシャマー：נשׁמה）[†8] を吹き入れられた．人はこうして

生きる者となった.」[7-9]（創世記2,7）と記されている．この生きる「者」とは「ネフェシュ」（נפש）というヘブライ語で表現されているものあり，それは「プシュケー」（ψυχή）というギリシャ語，「アニマ」（amima）というラテン語を経て「ソウル」（soul）という英語に到る[31]．つまり，人間として生きているのは，土の塵から形成された，体も含む存在全体としての「魂」である[29)†9]．

そしてこの魂に，霊（ルアハ：רוח）が注がれる[7-9]（箴言1,23）．「ルアハ」は世界創造に先立って存在した神の霊のことであり，「プネウマ」（πνεῦμα）というギリシャ語，「スピリトゥス」（spiritus）というラテン語を経て，「スピリット」（spirit）という英語に到る．この語は，息や霊を意味する「ネシャマー」と同様の意味として用いられ，「風」や「気」なども意味する[31]．これらは単なる自然現象ではなく，とらえがたく予測不可能なその動きをもって，現実の担い手，神の行為を媒体する力として述べられる[32]．魂は，これにより霊を自らの存在のすべてに受け，体験する．

霊に関しては，人のなかにある霊と，神の霊ないし息吹とがあまり厳密に区別されずに並置され，神の霊，（人の）霊，また，分別ないしは悟り[32]という意味での知恵の霊として理解されることもあると考えられる[7-9)†10]（ヨブ記33,4）．このうち，知恵の霊と人の霊に関しては，人間が予想を超える力を発揮し得た出来事にさいして，神の霊と混同されたものと考えられている[33)†11]．

これらの表現は，人と神の性質の差異は担保されたまま，人知に収まらない卓越した知恵の存在と，超越的な存在として働きかける神の霊とが，非凡な人間にダイナミックに働いている，という理解の表れであると考え得る．このように，霊は人に働きかけ，知恵を授け，秩序ある行為へと導く存在であると同時に，霊と知恵は人間が主体的に生きるなかで超越性をもち，その人に対話的に働きかける他者として関わる性質を持っていると理解されている．

人間は知恵を与えられ，それを用いて人生を歩むが，この世界と対峙することのなかに超越者との出会いが置かれている．人間は日常的な被造世界から問われると同時に，被造物という創造者による証しを通して理解に到るのであり，この問いと理解の根底と，それを超えたところに，人間の経験や合理性を超えた存在が認識され得る．神からくる知恵は，同じく神からもたらされる霊とともに人間に与えられ，人間の内に作用を及ぼし，超越性へと自己をひらく方向へと導く．

７．知恵とスピリチュアリティ

旧約聖書の知恵文学における知恵理解は，Von Radも指摘するように[13]（pp.23-26），概念的理解以上に，真の意味での生の「現実」に照らして理解することが重要である．すなわち目の前の世界に対峙しながら，見えている以上の広がりにおいて世界を捉えようとする模索である．そこには理論に収まりづらい予想外のダイナミズムをもって現実が展開されているために，期待どおりの規則性，法則性を発見するには到らない．人間はそこに向けて，自らをただ開放していなければならない．

人間は自己の認知する世界のなかで生きているが，それを超える世界の存在を意識ないしは仮定するとき，それによって現在の世界は相対化される．「スピリチュアリティ」は「霊」という見えない存在がその根源であるが，知恵はそのような世界を，合理的な方法だけに依らずに感知させようとする．知恵文学のなかで，知恵は，人間が理解すべき秩序を認知し，それに従って生きる，というあり方を示していた．これは「霊」を与えられた存在としての歩みであり，その性質ゆえに，超越者との対話可能な存在としての歩みであると言える．つまり，知恵は本来，超越者からもたらされたものであり，それは人間に与えられ働きかける霊のように，超越者の主体的な自己開示でもある．スピリチュアリティを「霊性」と理解したとき，それは超越者に起源するものであり，その点は知恵にも共通している．

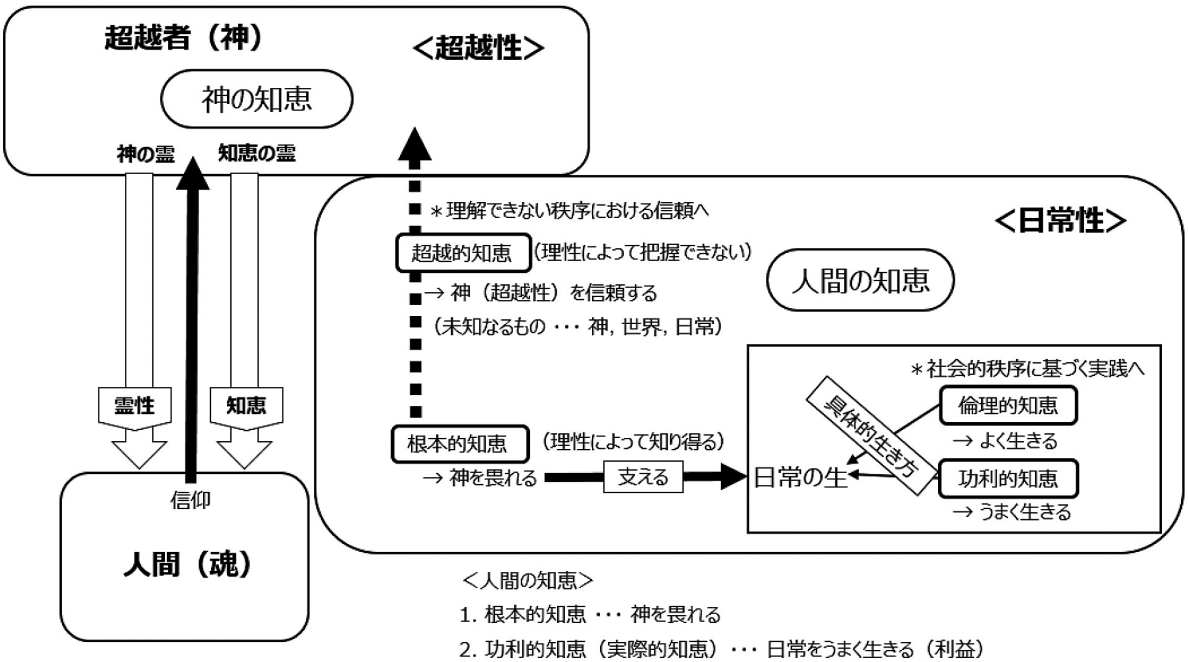
これらは同一視されるほど，人とかかわる神の働きとして認識されていたが，同一視されるものであるなら，知恵が日常生活のなかで与えられるように，スピリチュアリティもまた，日常生活のなかで与えられると考えられる．特別な日常，すなわち危機的な非常事態のなかでは，現実の意味を知る知恵を求めたヨブがそうであったように，スピリチュアリティについてもまた，超越者への信頼のうちに気付かせられるものであると言えるであろう．

８．結論

以上の考察から明らかになった知恵とスピリチュアリティについて，図1に示した．以下で内容を確認し，結論としたい．

人間は，現実的な見地や教訓から，有益さを志向し上手く生きるための功利的な知恵と，美しさを志向し，よく（トーブ）生きるための倫理的な知恵を用いて日々を歩む．

知恵とは本来，人間を幸福へと導こうとする神から与えられたものであって，その根本は超越者の存在を了解することに置かれる．この知恵は，いかな



＜人間の知恵＞
1. 根本的知恵 ・・・ 神を畏れる
2. 功利的知恵（実際的知恵）・・・ 日常をうまく生きる（利益）
3. 倫理的知恵（実践的知恵）・・・ 日常をよく生きる（美しさ）
4. 超越的知恵 ・・・ 神を信頼する

図１　霊性としての知恵

る現実をも歩んでいける，神および生きる世界への信頼を人間に得させようとするものである．そして，その実現に向けて取るべき具体的態度に関する知恵を，本稿では根本的知恵と呼んだ．

他方，人間は，功利的な尺度や倫理的な基準では解決できないような，受け入れがたい現実に直面することがある．ここにある，人間の知恵では理解し得ないことについて把握する知恵を，本稿では超越的知恵と呼んだ．これが，幸福（アシュレー）と形容される状態に人間を導くのである．

人間が到達し得ないこの知恵は，しかし，人間から完全に隔絶されているわけではない．霊が人間の全存在に与えられており，それは霊性つまりスピリチュアリティとして，超越性ないしは超越的な存在を知覚させる方向に機能する．スピリチュアリティは知恵と分かたれ難く共働し，人間に超越者の存在を認識させ，超越性の介入を承認させるように働きかける．そしてこの霊と知恵はともに超越者から与えられ，真の幸福に向けて，人間の歩みを根底から支えるのである．

本研究によって明らかとなったこれらのことは，定義が困難でありながらその重要性が認識されているスピリチュアリティに対して，知恵という側面からアプローチする可能性のあることを示唆するのではないか．そのためにも，今後，知恵とスピリチュアリティとの関連性についてさらに研究されることが必要であろう．

謝　　辞

本研究は，JSPS 科研費17K04290の助成を受けて行ったものです．

注

†1）文部科学省は1996年に，「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」のなかで，「生きる力」を，「これからの変化の激しい社会において，いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる，人間としての実践的な力」と定義し，それを，「生きていくための『知恵』」と述べている[34]．さらに，2010年初頭には，知恵を「資源小国である我が国の今後の発展の礎となるもの」と理解し[35]，以後もその涵養への努力を続けている．

†2）旧約聖書はイスラエル史のなかで形成され，プロテスタント教会では一般に39巻の文書から成るものと理解される．これは，その性質により律法書，預言書，諸書の三文書に大別され，諸書のなかに知恵文学と称されるヨブ記，箴言，コヘレトの言葉，という三文書，また詩編の一部が含まれている．

†3）たとえば,「いかに幸いなことか　知恵に到達した人, 英知を獲得した人は．…彼女［＝知恵］をとらえる人には，［知恵は］命の木となり［知恵を］保つ人は幸いを得る．」（箴言3，13-18，［　］内は筆者による加筆）

†4）古代イスラエルにおいて，ロゴスや理性といった，認識力を表現する統一的概念もまたないことが指摘される．

†5）雨宮は，ヨブ記28章のなかで「知恵」と「知識」が明瞭に分けられていることを指摘している．

†6）Von Rad[13] は, 知恵の定義づけが困難なほどに提示する原典テキストが詩的に豊かであることを指摘し, それは, 人間にとって理解しがたく最も価値のあるものとしての知恵を伝えようとする工夫であったと述べている．

†7）天地創造のさいに世界を組み立てた建築家，あるいは，神のそばで神の喜びを受けながら親しく関わる子ども，という意味のまったく異なる二通りの解釈がなされるが，これは“אמון”の翻訳上の問題があるためである．

†8）この語はのちに,「スピリット」（spirit）と英訳される．

†9）一般的には，魂と体は二分して考えられる傾向にあるのであり，WHO の「あなたの心と体と魂（mind, body and soul）にどの程度結びつきを感じるか？」という質問からも，そのように認識されていることがわかる．

†10）ヨブ記では，霊（רוח）と息吹（נשימה）とが同じようなものとして並列的に述べられる箇所があるが（33,4; 34,14），知恵と分別（בינה）も同じく並列的に言及されている（28,12）．そして，悟り（בינה）を与えるのが神の息吹と述べられている（32,8）ことから，そこに，知恵が神の霊によって与えられると理解されることが推測し得る．

†11）旧約聖書では，神の霊とこの霊に満たされた者が大切な働きを担うにふさわしいものとして述べられ，そのさいの力量が神の霊，匠の技の霊，知恵の霊に帰せられることもあることが指摘される．

文　　献

1）芝野松次郎 , 藤井美和：特集のことば―スピリチュアリティと幸福―. 先端社会研究，（4），1-4，2006.

2）Ardelt M and Edwards CA：Wisdom at the end of life: An analysis of mediating and moderating relations between wisdom and subjective well-being. *Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*，**71**（3），502-513，2016.

3）Krause N and Hayward RD：Virtues, practical wisdom and psychological well-Being: A Christian perspective. *Social Indicators Research*，**122**（3），735–755，2015.

4）文部科学省：今後における教育の在り方.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309590.htm，1996.（2017.9.30確認）

5）文部科学省：文部科学大臣・年頭の所感―次代の「人と知恵」を生み育てるために―.
http://www.mext.go.jp/magazine/backnumber/1289182.htm，2010.（2017.9.30確認）

6）春日彩花 , 佐藤眞一, 高橋正実:心理学的知恵研究の展望と発達的検討―「知恵のある」状態の連続性と非連続性―. 生老病死の行動科学，**21**，15-31，2017.

7）Elliger K and Rudolph W eds：*Biblia Hebraica Stuttgartensia*. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart，1998.

8）Ralfs A and Hanhart R eds：*Septuaginta*, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart，2007.

9）新共同訳聖書実行委員会編：聖書　新共同訳．日本聖書協会，東京，1988.

10）WHO：*WHOQOL-SPRB Field-Test Instrument: The WHOQOL-100 Questions Plus 32 SRPB Questions*. WHO, Geneva，2002.

11）Müller H-P and Krause M：“חכמה”. In Botterweck GJ and Ringgren H eds, Green DE trans, *Theological Dictionary of the Old Testament*，vol. Ⅳ , WB. Eerdmans Publishing, Grand Rapids，364-385，1980.

12）西村俊昭：旧約聖書における知恵と解釈．創文社，東京，2002.

13）von Rad G：*Weisheit in Israel*. Neukirchener verlag, Neukirchen Vluyn，1970.

14）Botterweck GJ and Bergman J：“דעת”. In Botterweck GJ and Ringgren H eds, Green DE trans, *Theological Dictionary of the Old Testament*，Vol. V，WB. Eerdmans Publishing, Grand Rapids，448-481，1980.

15）雨宮慧：聖書の知恵の現代的意味．キリスト教文化研究所年報，**36**，61-81，2014.

16）W･H･シュミット著，山我哲雄訳：歴史における旧約聖書の信仰．新地書房，東京，1985.

17）Assmann J：*Ma'at: Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im Alten Ägypten.* Verlag C. H. Beck, München，1990.

18）J・L・クレンショウ著，中村健三訳：知恵の招き―旧約聖書知恵文学入門―．新教出版社，東京，1987.

19）L.G. パーデュー著，高柳富夫訳：箴言．現代聖書注解6，日本キリスト教団出版局，東京，2009.

20）小友聡：秘密は隠される―旧約知恵文学の思想的本質―．東京神学大学紀要，**13**，101-116，2010.

21）Barton J：Ethics in the Wisdom Literature of the Old Testament. In Jarick J ed, *Perspectives on Israelite*

Wisdom Proceedings of the Oxford Old Testament Seminar, Bloomsbury, London/Oxford/New York/New Delhi/Sydner, 24-37, 2016.
22) Cazelles H：“אשרי”. In Botterweck GJ and Ringgren H eds, Willis JT trans, *Theological Dictionary of the Old Testament*, vol. Ⅰ, WB. Eerdmans Publishing, Grand Rapids, 364-385, 1970.
23) Höver-Johag I：“טוב”. In Botterweck GJ and Ringgren H eds, Green DE trans, *Theological Dictionary of the Old Testament*, vol. Ⅴ, WB. Eerdmans Publishing, Grand Rapids, 296-317, 1988.
24) W.P. ブラウン著，小友聡訳：コヘレトの言葉．現代聖書注解10，日本キリスト教団出版局，東京，2003.
25) Whybray RN：Wisdom, Suffering and the Freedom of God in the Book of Job. In Ball E ed, *Essays in Old Testament Interpretation in Honour of Ronald E. Clements, Journal for the Study of the Old Testament Supplement Series 300*, Sheffield Academic Press, Sheffield, 1999.
26) Fox MV：Ideas of Wisdom in Proverbs 1-9. *Journal of Biblical Literature*, **116**(4)，613-633，1997.
27) J.G. ジャンセン著，飯謙訳：ヨブ記．現代聖書注解36，日本キリスト教団出版局，東京，1989.
28) Ceresko AR：*Introduction to Old Testament Wisdom: A Spirituality for Liberation*, Orbis Books, Maruknoll/New York, 1999.
29) WHO：*WHOQOL-SRPB Users Manual. Scoring and Coding for the WHOQOL SPRB Field-Test Instrument*. WHO, Geneva, 2002.
30) WHO：*WHOQOL and Spirituality, Religiousness and Personal beliefs (SRPB)*. WHO, Geneva, 1998.
31) 梶原直美：「スピリチュアル」の意味―聖書テキストの考察による一試論―．川崎医療福祉学会誌，**24**(1)，11-20，2014.
32) Ringgren H：“בינה”. In Botterweck GJ and Ringgren H eds, Green DE trans, *Theological Dictionary of the Old Testament*, vol. Ⅱ, WB. Eerdmans Publishing, Grand Rapids, 99-107, 1977.
33) M・ヴェルカー著，片柳榮一，大石祐一訳：聖霊の神学．教文館，東京，2007.
34) 文部科学省：21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）.
`http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701e.htm`, 1996.（2017.9.30確認）
35) 川端達夫：新年を迎えて.
`http://www.chifuren.gr.jp/press/p401/newsback-401_1.html`, 2010.（2017.9.30確認）

（平成30年１月19日受理）

Spirituality in the Understanding of "Wisdom" in the Wisdom Literature of the Old Testament

Naomi KAJIHARA

(Accepted Jan. 19, 2018)

Key words : spirituality, wisdom, transcendental wisdom, fundamental wisdom, Old Testament

Abstract

This paper examined the relationship between wisdom and spirituality through the understanding of wisdom as seen in the wisdom literature of the Old Testament from the original Bible texts. It was shown, first of all, that wisdom is centered on the order of reality, and that in that order there is practical wisdom, such as utilitarian and ethical wisdom, as well as transcendent wisdom. Moreover, it also became clear that spirituality is a spirit, like wisdom, provided by the transcendent God on a person-wide and daily basis. Furthermore, it could be understood that that wisdom indicates the existence of the transcendent God and leads one to the well-being of living in the trust of that transcendent being.

Correspondence to : Naomi KAJIHARA

School of Education
Kwansei Gakuin University
Nishinomiya, 662-0827, Japan
E-mail：kajihara@kwansei.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 293－301)